さよなら、ユーリ。

音踏よしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよなら、ユーリ。

【Ｎコード】
Ｎ６２７１Ｙ

【作者名】
音踏よしの

【あらすじ】
ユーリという“少女”がいる。僕のことが大好きらしい。僕に殺されたいとも思っているらしい。変な人だと思うけれど、僕は彼女を受け入れる。……この話は、フィクションです。

冷たい床に落ちる光

庵原祐里。“ユーリ”と名乗る彼女は、僕のことが好きらしい。平凡な僕の生活を台無しにするくらいに、僕の日常を愛し出す。その愛は、一体どこにいくんだろう。少なくとも、僕の心ですべてキャッチできてはいないだろう。現に、少々引いている節があるし。怖いし。愛が重いし。可愛いけど。可愛さはパーフェクト☆だし。

特殊な価値観を持って生まれた彼女と、ごくごく普通の男子高生になろうとしている僕の、甘々青春ラブストーリー。……フィクションです。

登場人物

◎木暮暁人（こぐれあきと）／「僕」

１７歳　１８０センチ　一人称「僕」　二人称「お前」
外見がイケメンの部類に入るので、何かと女子からは人気。
けれど、性格が少々残念。
珈琲や詩集、絵画などの芸術を好む男子高生。

◎庵原祐里（あまはらゆうり）

１７歳　１６５センチ　一人称「私」「ユーリ」
小暮暁人をこよなく愛する。彼以外は眼中にない。
中性的な美形で、髪の毛の色素が極端に薄い。
淡々とした口調、性格だが、感情が昂ると攻撃的になる。

◎綾瀬千里（あやせせんり）

１７歳　１７５センチ　一人称「俺」　二人称「アンタ」
暁人のクラスメイト。ボケーとしており、やる気が無い。
絵に関しては多彩な才能を持っており、美術展にも展示されるほど。
あまり周囲に興味が無く、特に絵を描いている時はそれに没頭している。

◎桜庭小夜（さくらばさよ）

１８歳　１５８センチ　一人称「アタシ」　二人称「きみ」

暁人の先輩。保健室登校。

雑音が苦手なため、常に静かな場所を好んでいる。

腰以上に長い髪で、垂らしている。趣味は読書と動物殺し。

01-1　真昼の月の下

11月も半ばになると、肌にピリピリとした冷たさが纏わりついてきて、正直鬱陶しい。

冷たくなった手のひらを、さっき自販機で買った珈琲の缶で温める。

……遅い。

片田舎の小さな公園のベンチ。学校が終わった後、ぼんやりとここで数十分は時間を持て余している。この珈琲も、これで4缶め。

相手が携帯を持っていないから、連絡の手段が無い。今日は診断の日だと言っていたから、この公園を通りかかるはずなんだけど。

プルタブを指の腹で逆向きに抑え、珈琲を飲む。

そういえば僕は、小さい頃から珈琲を無糖で飲むという、洒落た子どもだったっけ。

早くダンディな大人になりたかったんだろうかと、とてもどうでもいい回想を膨らませていると。

ひとりの少女が目に入った。

色素の極端に薄い髪は長く、人の目を引きやすい。彼女も学校帰りなのか、僕と同じデザインの女子の制服を着ていた。

ちなみに、すっげえ美人でもある。ぶっちゃけ髪の次に目を引く。

僕が待っていた、庵原祐里だ。

まだこちらに気づいていない彼女の足取りはおぼつかず、うつろ気味な目は常に下を見続けている。
風の冷たさを感じないかのように、表情が変わっていない。
ふらふらと、僕に気づかないまま素通りしようとしていたから、慌てて珈琲を飲み込む。

「ユーリっ」

喉の熱さに耐えながら声をかける。立ち止まる。
振り返り、僕の姿が視界に入ったであろう瞬間。

「……暁人？」

いままで伏せていた目がパッチリと開き、口元がわずかに震えている。
今日待ってるって言ってなかったから、驚いているのかも知れない。

「久しぶりだな。一緒に帰ろうか」

庵原祐里に告白されたのは、いまから……何年前だったっけ。

よく覚えてもいないのは、たぶん普段から「好きだ好きだ」と言われているせいだろう。
その言葉の意味の重さを、彼女はきっと理解していない。
僕はその告白を、承諾したわけではないけれど、受け入れないわけでもなかった。

「2週間ぶりか……。学校にも行かないで、なにしてたんだ？」
「部屋にずっといたよ」
「具合でも悪かったのか？」
「心配してくれてるの？」

僕の質問を無視して、ユーリが期待の眼差しでこちらを向く。
狭いベンチにふたり。その密着度は未知数。ユーリは珈琲を飲まないので、冷えた手を僕の手の体温で温めていた。

「一応、ね」
「嬉しい。暁人も具合悪くなったら、私が心配してあげる」
「看病はしてくれないのか、ユーリ」
「家に行ってもいいの？」

返答は少しばかりズレているものばかり。

「家……は、無理かな」
「いつか、暁人の家に行ってみたい」
「いつかね」

約束をうやむやにしつつ、残った珈琲を飲み干して、僕は立ち上がる。ユーリもそれに習う。手を繋いで、公園から去っていく。
並んで歩いている時も、彼女の態度はちっとも変わらなかった。

会話の内容の割にはどことなく冷めた口調。表情もあまり変わらない。けれど、繋ぐ手の強さはユーリの家に近づくにつれて、強くなる。

「2週間家にいたって……家事とか、どうしてたんだ」
「自分でやれることは自分でしてみたけど、やっぱり私には無理。不器用すぎるから」
「メシとか……ちゃんと食ってんのか？」
「痩せたいから食べない」

それ以上痩せたら標本になるぞ、お前。ただでさえ細身なのに。

「死なない程度には食べてるよ」
「もっと食え。今日は僕が作る」
「暁人の手料理が食べれるの？」

久しぶりに見た、ユーリの柔らかそうな顔。いや、表現の仕方がわからないな。柔らかいって……ほっぺとか普通に柔らかいだろう。まあいいや。

「嬉しい。ずっと暁人が家にいてくれたらいいのに」

デレた。
けど、顔と口調がデレてない。
何の脈絡もないデレが僕の頭を駆け巡っていたけど、それはユーリの爪が僕の手の甲を刺したことで終わった。

「っ、痛……痛いって、ユーリ」
「ずっと、一緒にいてくれたらいいのに」

長い爪が皮膚を裂いて、痛みと血が流れ出る。振りほどこうとしたけど、痛みにはある程度慣れているので放置することにした。
しばらくは引っ掻いたり、ネバつく血を手の甲になすりつけたりしていたけれど。
ふと、立ち止まって、何かを考えてから、口を開いた。

「暁人を拉致っちゃえばいいのか」

01-2

ユーリの家は古びたアパートだ。
悪趣味としか言いようのない、薄桃色の外装。長年塗装をしていなかったのか、茶色に汚れている。
階段を上り、錆びた鍵で扉を開ける。ちなみに、３０１号室。

「私はお腹がすいたから、何か食べさせてくれる？」
「その前にちょっと、台所借りるよ。ああほら、靴脱げって。脱げ、こら」

土足で上がり込もうとするのを阻止し、ユーリの足を持ち上げる。バランスを崩しそうなので、僕の肩に捕まらせる。細く冷たい足から靴を脱がせると、子どものように廊下を走る。
……そういえば、ユーリの家に来るのも久しぶりだな。
外見の割にはけっこう綺麗にされている部屋。見た目がアレだから、家賃も安いんだろうな。
うろ覚えの記憶を頼りに台所へ行く。さっき、ユーリに爪で刺された手を洗う。血が水と混ざって、薄くなる。

水の流れって、なんでこんなに落ち着くんだろう。雨の音は嫌だけれど、静かな流れは心地いい。
手の甲から流れる血と水をぼんやり見ていると、背後に人の気配がした。まあ、ユーリしかいないわけだけど。

「流しちゃったの？暁人の血」

「ああ……うん」
「そう。残念」
何故か、カラになっているジャムの瓶を持っているユーリ。
「これに、暁人の血を入れようと思ったのに」
「……“それ”、まだやってたのか」
ユーリは僕の体の一部さえも愛している。カサブタだとか、涙だとか、爪だとか。コレクションしているらしく、彼女の部屋にはビンがぎっしりある。カサブタのビンとかは悲惨だ。あれは僕も見たくない。
「私、暁人を愛してるの。だから、暁人のぜんぶが欲しい」
「もう何もかもあげてるんだけど……」
「ううん。まだだよ。全然足りない。私、欲張りだから」
既に止まった傷口を凝視し、ユーリがそっと指でそこをなぞる。
くすぐったいんだか何だか分からない感覚は、慣れない。
「ねえ……私、お腹がすいた」
「何か作ってやるから、手、放してくれる？」
「うん……ん……いいよ」
名残惜しそうに手を放し、ビンをテーブルの上に置く。ユーリは自らの手首を掻きながら、椅子に座った。
そこからだと、台所に立つ人間の顔がよく見える。
「暁人の料理、楽しみ」

まったく楽しんでいないような表情。だけれど、彼女は確かに感情を持っている。
ただ、それがうまく表現できないだけで。

冷蔵庫にあった小松菜を茹でながら、物思いにふける。
感情を完全に壊死させるには、どうすればいいのか。
そんなこと、通常の人間に出来る訳がない。人間誰しも感情があり、喜怒哀楽があり、痛覚もあれば微笑むことだってできる。
もし、感情を失うとすれば、もはや人間ではない。機械だ。
しかもそれを人間に強いる事は、人権を確実に認めていないことと同じだ。喜怒哀楽を奪えば、廃人になるだろう。それを強要することは出来ないし、そんな権利は誰も持っていない。
けれど、“彼女”の親は、それを成そうとした。
「沸騰してるよ、暁人」
「あっ」
ぼんやりしていた。迂闊だった。

いつのまにか椅子から離れていたユーリが、沸騰して泡立っている鍋の中に、人差し指を突っ込んでいた。

「ばっ、ユーリっ」

慌てて指を抜き、冷水で冷やす。

火傷をしたというのに、ユーリの表情に何の変化はない。

「痛くないか？」

「ぜーんぜん平気。こんなのなんてことないよ。でも、沸騰して……暁人が火傷しちゃったら、痛いし……」

「火はもう消した。俺は平気だから。こういう危ないこと、もうすんなよ」

「わかった」

素直なところがいいねーユーリはねー。テキトーに笑いを作って、ガスコンロの火を止める。

「もう少しで出来上がるから、テレビでもつけて待っててて」

「ニュース、の時間だよね」

「ああ……そうだね。7時だから……。ていうか、最近は暗くなるのが早いな」

もう真っ暗だ。ていうか、寒い。暖房つくかな。

白米を茶碗に盛りながら、リモコンを探してみる。それっぽいのは無い。

「ユーリ。暖房つけたいんだけど、リモコンどこにあるか分かるか？」

「ねえねえ、暁人。人が殺されたって」

「あ？……そんなの、毎日のように殺人は起こってるから、珍しくもなんともねえだろ」
「そうなんだけどね。珍しくはないよ、暁人」
テレビを覗き込んでいたであろう目が、僕に向けられる。
一切の悦楽を受け付けることのない、虚ろな、どんよりとした瞳。
「うちの学校の子が、殺されちゃったみたい」

01-3

殺害されたのは、学年は違うけど僕と同じ高校の人だった。……正確には、“僕ら”だけど。

珍しそうにテレビ画面を凝視し、ユーリが自身の髪の毛を指でクルクル弄る。癖らしく、小学生の頃からやっていた。

「ユーリはこの子知ってる？」

画面に出てきた、ごくごく普通の女子高生の写真を指差し、問う。事件には興味あるけれど、被害者に対しての関心は薄いようで、

「知らない」その返答も淡白なものだった。

「私、暁人にしか興味ないもの」

「お前、クラスの奴らの名前、全員言えねえだろ」

「覚えて何になるの？得することなんて、無いじゃん」

「まあ……そりゃそうだけど……」

クラス替えしてもう半年も経つのに……。そういえば、ユーリをそろそろ学校に出席させないと。期末テストも近いし。出席日数も危うい。

「ユーリ、明日から学校行こうな」

「暁人は寂しがり屋……？私が２週間学校を休んだくらいで、そんなに不安？」

「うん。すっごく心配してる」

ユーリが無意識の自傷行為で倒れてないか、とか。

「嬉しいけど……私、学校にはあまり行きたくない。でも、暁人が一日中いっしょって約束してくれたら、行ってもいい」

「約束しよう。僕らはずっといっしょだよ」

口に運んだ白米を飲み込んで。

ユーリの目が、僕をまっすぐに見据える。

一切の動揺をも許さない、真っ黒な瞳。

「……じゃあ、約束ね」

「はいはい……ん、んんんんっ」

キスされた。

しかも、舌がベロリと入ってくる。まだ僕の口の中に残る白米をすべて舌で取って、唾液もすすられる。卑猥な音がして、ユーリの口が離れる。

「ん……約束」

ユーリは表情ひとつ変えない。僕の方が、心臓、バックバクだ。不意打ちはやめて欲しい。しかも、ディープキス。思い出しただけで顔が火照る。

すべて食べ終わった食器を流し台に置いた後、皿洗いもせずに、僕らはソファで隣り合って座る。

「物騒だよな。被害者の女子高生の子宮を取り出したんだってさ」

「切り裂きジャックみたいだね」

「ああ……そういや、そうだな。内容が似てる。そういうのに影響

されたのかねえ」
「内臓とか見て、オエッてならないのかな」
「そういうのが好きなんじゃねえの？」
あまり深く考えずに言うと、ユーリが珍しく笑いながら、
「でも、私は暁人の内臓だったら、綺麗だなって思う」
「……どうも」
素直に喜んでいいのか分からないから、適当に相槌を打ってみる。
いつ腹を開けと強要されるか分からない。我ながら、笑えない冗談だ。面白くもない。
携帯を見ると、家からの着信が４件あった。脳内にヒステリックに起こっている母親の姿が浮かぶ。
「ユーリ。僕はそろそろ帰るよ。母さんが怒ってるし」
「……なんで？」
少しだけ、ユーリの表情が曇った。
「母さんにユーリの家に行くって、連絡してなかったから。きっと怒ってる」
「暁人のお母さんって、うるさいよね」
「こら」
人の親を躊躇なく罵るユーリ。
軽く額をつついて、立ち上がる。ユーリが腕を掴んできた。立ち止まる。
「暁人、さっき約束してくれた。いっしょにいてくれるって」

「確かにそう言ったけど、それとこれとは別問題だろ」
「別じゃないっ！」

瞬間、視界がブレた。
ユーリが足技を仕掛けてきたと分かったのは、数秒後。
気づけば、彼女に押し倒されていた。

「別じゃ……別なんかじゃない！暁人はずっと私といっしょなんだよっ。なのにどうして離れようとするの？ねえ、なんで……なん、でええええ？」

ガクガクと震える体。僕を失うかもしれないという恐怖感と、焦燥感。
これから起こる未来がすべて恐ろしいことでもあるかのように、ユーリは怯えていた。

「……学校に行ってない間の2週間、何があったんだよ」

どうせ、家でずっと寝てたってわけじゃないんだろ。

「く、薬……薬、もらいに……びょーいん、行ってた……」
「薬……。きらしてたのか？」
「そ、そう……。なんか、もう、ずっと……部屋で……暁人呼ぼうとしても、声がね、出なくて……」
「安定剤、どこ？それ飲んでもう寝ろ」
「暁人がいないと無理なんだよっ！」

おもいっきり頭を床にぶつけられる。目がチカチカして、鈍い痛みが全身を襲った。
このまま気絶させる気なのか、何度も何度も何度も何度も何度も

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も打ち付ける。
痛い。だから、なあ、痛いって。
「暁人……暁人が私を安心させてくれるんだよ……。暁人がいないと生きていけない。私、暁人になら子宮を引きずり出されても平気なくらい、暁人のこと好き」
「……僕も、頭を何度も床で殴打されても許せるくらいには、ユーリのこと、好きだな……」
冗談です。けっこう痛いです。そろそろ止めていただきたい。
手首が疲れたのか、だんだん力が弱くなっていった。そして、そのままスピードは落ちていって。動きが、止まる。
静寂が訪れて、ユーリの眼球がテレビの方へ向く。音量は、小さい。アナウンサーが何を言っているのか、よく聞こえない。
「どうしたの？」
聞いても返事せず、乾いた眼球で一点を睨みつけるユーリ。
上半身を起こして、テレビ画面を見る。
まだ先程の女子高生殺害事件を報道しており、そしてテレビ画面には、とある一枚の絵が映し出されていた。
「……」
その絵は、とても美しく、とても残忍だった。
白い少女の裸体から、赤黒い体の中身がぶちまけられている。柔らかそうな皮膚にその赤は映えていて、とても綺麗だけど。
少女の苦痛そうな表情、周りにあるどす黒い男の影から、それがとても悲惨な絵であることにかわりはなかった。

ニュースでは、今回の事件の被害者の発見時の様子が、この絵と酷似しているという。

けれど、問題は、そんなことじゃなくて。

「……ユーリ　「ひゃあああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ、ぎいいいいいいいいいいいいいいいいッ」

止まっていた時間が早送りしたみたいに、ユーリの体が痙攣する。嘔吐する。薄黄色の吐瀉物が床に吐き出され、鼻水と涙が一気に溢れる。

長い髪を掻き毟りながらその場に座り込み、右腕に爪をたてはじめた。

「ユーリっ」

瞳は凝縮と膨張を繰り返し、意味不明は不協和音を並べながら、ユーリが崩れる。

……迂闊だった。

あの事件を見たとき、思い出すのは「切り裂きジャック」とかじゃなくて。もっと別に、僕たちに関わる事件があったのに。

さっき出てきた、少女の無残な絵。

あのモデルは、いま僕の目の前にいる、ユーリ本人だ。

01-4

長い長い嘔吐が終わり、汚れた床にユーリが倒れる。
細い体を抱き上げて、彼女の頭をさする。胃液で汚れた髪の毛は粘ついていたけれど、不快感はなかった。
「落ち着いて、ユーリ。この世界には、僕がいるだろう」
気休めにもならない言葉を吐いて、彼女を納得させる。
傷が開いて血が滲んだ手首には、うっすらと古い傷跡も残っていた。
ユーリは顔を上げて、涙と鼻水と唾液でぐちゃぐちゃになった顔で僕を見る。
「たすけて、あきと」
忌まわしい過去の残像から、私を助けて。
そうユーリは言っている。けれど、僕にはユーリの記憶を消すことなんて、できない。
「ユーリ、きみは僕とふたりでここにいる。悪い人たちはいなくて、僕だけがきみの傍にいる。何か不満なことがある？」
「ない」
必死で服の袖を掴み、ユーリが断言する。

「あんな奴ら、大嫌い」

ユーリが言っている“あんな奴ら”。
彼女は不幸で数奇な人生を歩んできているけれど。
それは、あまりにも悲惨で、残酷だ。

「あいつら、生きてたのかな……。生きてて、私を殺しにきたのかな……」
「そんなことないよ」
「でも、だって……似てるもの……。あの絵に……似てたもの……」

掠れた声で言い、ユーリが歯ぎしりする。その表情は静かな怒りと恐怖で引きつっていた。いまだに絵を晒しているテレビ画面を睨みつけ、僕の腕から離れる。
傍にあった花瓶を手にし、思い切りテレビ画面に投げつけた。
音が響いて、花瓶が割る。中なった水と花もそこらへんに散らばる。

「……殺してやる」

水で濡れた画面を見て、静かにユーリが言った。

「何度でも殺してやる」

いまから2年前。
とある画家が何者かによって殺害され、その容疑者としてひとりの男子児童の名前があがった。
彼は、画家の息子であり、彼から酷い虐待を受けていたという。
虐待の被害は息子だけではなく、他にも数人の児童が監禁されており、彼の絵の「モデル」を強要されていた。
隙を見て画家を殺害した息子は、その後、精神への疾患が見なされ、無罪となった。

他の被害者は、のうのうと自宅待機中だ。

「学年は違うけど、僕らの高校のやつが殺されたんだ。自宅待機になるのは当たり前……か」
「これで暁人といっしょにいられるね」
「……へいへい」

親に電話してユーリの家に泊まると伝えた時は、かなり罵倒されたけどな。もうあの人はどれだけの悪口を蓄えているんだか。

「葬儀は身内だけ……か。まあ、殺され方が悲惨だったからな」
「殺され方なんてどうでもいいよ。死ぬか生きるかなんだから」
「……ユーリは、死ぬことに執着を持ってないよな」
「持ってない。いつ死ぬか分からないし」

昨夜の錯乱とは違い、けろっとした顔でユーリが言い切った。
床にゴロリと寝転んで、ダラダラと漫画を見ている。きっと、見

ているだけで、読んではいないだろう。ラブコメは、ユーリにとって非常にどうでもいいことだから。他人の恋の話ほど、彼女の好奇心をそそられないものはない。

「……死ぬのは怖くないのか？」

「怖くはない。……けれど、暁人以外の人間とか病気とかで死ぬのは嫌だ」

「僕がいまからユーリを殺すとしたら、ユーリはどうする？」

ピタリと。

ページを捲っていた手が止まる。

上半身をむくりと起こし、無機質な目でユーリが僕を見つめた。

無表情で、淡々と、彼女は僕の殺意を受け入れる。

「とても素敵な最期だね」

言って。

僕のほうへ四つん這いで這ってくる。長い髪が床に引きずられる。

ソファに座っていた僕の膝の間に割って入って、腰に手を回してきた。

「……なに？」

「ねえ、暁人。私ね、暁人のことになると見境がなくなる。暁人が本当に好き。愛してる」

「知ってるよ」

「だからね、私を抱きながら、絶頂に導きながら、殺して？」

無理な注文をしてくるやつだ。

「僕は死体相手に欲情する趣味はないんだ」

「……だったら、私の願いは一生叶わないね」

悲しそうにユーリは呟いて、そっと僕にキスをした。

乾いた唇。

その感触が生々しくて、やけに現実味を帯びていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6271y/

さよなら、ユーリ。

2011年11月24日00時45分発行